

資本制大工業と労働の要素化

— G・ルカーチの資本関係における物象化論の批判 —

横 山 敏

目 次

1. はじめに
2. ルカーチの「物神性」認識とその再構成
3. 資本制大工業と労働の要素化
4. ルカーチにおける労働過程「合理化」論の性格
5. 結 び — 残された課題 —

1. はじめに

われわれは、本稿において、大工業を基礎とする生産組織の性格を労働者に対する「支配」の組織として把握する視点から、G・ルカーチの『歴史と階級意識』の資本制大工業論をとりあげる。今日、巨大組織や物質文明のなかで諸個人が歯車化し主体性を喪い孤立化するという意識は、日常的意識となっている。そして、各種の政策集団の側からも「疎外」への対処が六〇年代以降叫ばれてきた。ルカーチのとりあげるのも、大工業や大経営組織における「計算合理性」への諸個人の絶望的隷属とかれらの分裂という問題であった。しかし、ルカーチは、資本物象の客観的、実質的支配という契機のなかでその問題を位置づけようとしている。そこで、われわれには、この試みを積極的に評価しつつ批判的に継承する方法態度が要請される。かれの努力は、生産組織のなかまでわけいり、そこでの労働者諸個体の作業と意識の経験的な在り方を資本関係の論理のなかに位置づけて洞察しようとする方向に向けられた。

残念なことに、ルカーチの他の諸領域からの批判的継承は多くなされているが、かれの「大工業と労働の要素化」の理論に対する積極的と

りくみはあまりみられない⁽¹⁾。そして「労働の要素化」問題の理論的認識それ自身、まだかなり未解決の領域であるように思われる。

本稿においては、ルカーチの労働過程「合理化」にかんする抽象的認識を具体的な資本関係を基軸とする認識に組み込んで、労働過程「合理化」論の現実的根拠を探ろうとしている⁽²⁾。

2. ルカーチの「物神性」認識とその再構成

われわれは、資本制的生産過程にかんする日常意識をたんに直接性において把えるばかりでなく、媒介された現実的で総体的な経営社会理論に構成していく必要がある。そうした努力の一つとして、しかも必ずしも成功しなかった努力の一つとして、われわれはここでルカーチの『歴史の階級意識』をとりあげようと思う。ここでわれわれがルカーチをとりあげるのは、大工業（さらに拡張していえば事務所）における労働の質的特殊性が失われ、部分的、機械的、画一的労働の繰り返しとしておこなわれること、すなわち職務の専門化の資本関係とのかかわりをとりあげているからである。

(1)

(1) ルカーチによる「物神性」の把握

ルカーチの論理の出発点をなすのは、資本論第一部、第一篇、第一章、第四節「商品の物神的性格とその秘密」である。すなわち、商品形態の秘密が「労働の社会的性質を、労働生産物自身の自然属性として反映させ……生産者の総労働に対する社会的関係をも、彼らの外に存する対象の社会的関係として反映する……この混同によって、労働生産物は商品となり、感覚的で超感覚的な物となる。……人間に対して諸物の関係が幻想的形態をとるのは、人間自身の社会的関係にすぎない(3)」ことに求められる。マルクスが商品の物神性の批判的省察において主題とするのは、対象的活動としての生産活動における人間と人間との**関係行為 (Verhalten)**、およびその結果としての**社会的生産関係 (Verhältnis)**の形態が物と物とのあいだの関係という姿で直接的現実において現象するということである。すなわち、商品生産関係——商品—貨幣を媒介とする社会的交通形態——においては、かかる生産関係から自立的に、自然属性をもつ諸物がかってに**関係する**かのように現象するのである。このことを、ルカーチは、「商品構造の本質は、人間と人間との**関係行為**、関係が物象性という性格をもち、こうしてまた『幻の対象性』をもつようになり、その厳密な、見かけ上は完結した、合理的な独自の法則のなかに、みずからの根源的本質である人間関係のすべての痕跡を蔽い隠している(4)」と述べている。物神性についてのこの把握はまったくそのとうりであるのだが、論証の正確さという点からいうとだいぶ不明確な点があるように思われる。

マルクスは、第一篇「商品と貨幣」のなかで、しかも第一章「商品」論の第三節「価値形態または交換価値」のあとで、私的生産=および交通の担い手としての諸個人の直接的感覚が価値形態の下で、その形態に内在する構造そのものによってどのように歴史および社会を抽象して物象的に現象するかを第四節の物神崇拜の

部分において解明しているのである。したがって、価値形態としての社会的形態の批判的分析なしに物神性だけをぬきだして論ずることは論理的に不十分であり、物神性の性格を正しく措定しているとはいえないのではないかと思う。というのも、物神性の把握は、第四節においてのみ展開されているのではなく、その基礎はすでに第三節、価値形態論において与えられ、それを内包しているからである。周知の「二〇エレのリンネル=一着の上着」という等式をここでとりあげよう。「二〇エレのリンネル=一着の上着」という単純な価値形態では、織布と裁縫という具体的労働によってつくられた使用価値としてのリンネルと上着とがある量的比率で関係をむすぶかのように見える(そして、現実には商品は物と物との一定の比率での交換として現象するのであるが、そう見えるのは、リンネル商品の価値表現において、裁縫という具体的労働のつくる上着使用価値がその物象そのもの自身でリンネルの価値の実現形態となることによってである。そうすることによって織布労働=およびリンネルは、織布やリンネルそのものなく、価値を形成する抽象的な労働および価値であることを表現するのである。そのゆえに、価値形態は、二つの物の重量の等置のように可視的な自然の関係にあるのではなく、社会的関係として不可視的な他の商品の価値を実現し、一定の属性をもった物それ自身で価値の現象形態として存立することから、社会的な交通=および生産関係が物と物との関係として現象し、諸物の自立した関係としてわれわれの目に反映するのである。

価値形態論においてこのような交通=および生産関係に対する日常的仮象の現実的基礎が認識されているからこそ、第四節において次のような物神性の根拠が全面的に示しだされるのである。「いろいろな人間労働の同等性はいろいろな労働生産物の同等の価値対象性という物象的形態を受けとり、その継続時間による人間労働の支出の尺度は労働生産物の価値量という形態を受けとり、最後に生産者たちの労働の……

社会的規定がそのなかで実証されるところの彼らの諸関係は、いろいろな労働生産物の社会的関係という形態を受け取るのである(5)。」このように、一つのあるいは多数の商品がその価値を表現し実現するのは、その商品(相対的価値形態)の価値が他の商品自身の物的対象性において表現されるからである。そのゆえに、一ないし諸商品の他の一商品とのすなわち等価形態との相対的な社会的生産関係を物と物との関係として現象させるのである。

ところで、具体的労働の生産物としての使用価値が商品となるのは、相互に独立した私的諸労働の生産物であるからであり、私的労働が交換によって労働生産物を媒介とし、他の労働生産物の体で表現され実現されることによってのみ諸労働の抽象的人間労働という共通の性格をもつからである。人間の営む生産活動は、どの歴史的形態においても、多様な個性をもった具体的労働が対象的活動として、社会的に有用なさまざまな労働生産物を形成するという、人間と自然との間の物質代謝活動である。交通=および生産関係としての社会的形態を把握すれば、他者に無関心な私的労働が自らの労働を他の私的労働によって表現し、価値として実現することによって、事後的に、労働の具体的性格を抽象した同等な人間労働としての労働の社会的性格を確認し、この社会的形態での(商品形態での)人間と自然との物質代謝活動を営むことになる。すなわち、人間の自然に対する対象的關係行為に際してのかれら相互の活動は、本源的には、対自然的にも対他的にも、対象を獲得するという意味で主体的な領有(Aneignung)活動であるが、商品形態においては、この関係行為は諸物象の外化された関係として、そしてそうした物象と人間との関係として、現象し、反映するのである。この諸人格の行為が諸生産物の交換において、それらを価値として等置することによって労働の交換をおこなうのであるが、「かれらはそれを知らずに行う」とマルクスが言っているのは、この行為および意識の価値対象性にとらわれた無概念性をさしているの

である。

そして、物と物とのこの関係は、交換者たち自身の社会的関係行為が「諸物の運動の形態をもつものであって、彼らはこの運動を制御するのではなく、これによって制御される(6)」ものとして現象する。そして、このことは、相互に独立に営まれる社会的分業の編制としての私的労働相互の全面的依存が自立した諸物象の変動する交換割合をつうじて、かれらの無意識のうちに、生産物の生産に必要な労働時間による価値量の規定を規制的な自然法則として暴力的に貫徹させることに示されるのである。

われわれは、いままで、ルカーチの物神性にかんする結論に正当な論理的手づきで到達するために、価値形態論や交換過程論を補足することによって、論旨の明確化に努めてきた。こうした論理をふまえたうえでルカーチのいう物神性の次の結論が正当に導かれるのである。

「人間独自の活動、人間独自の労働が、なにか客体的なもの、人間から独立しているもの、人間には疎遠な固有の法則性によって人間を支配するものとして人間に対立させられる(7)」。

(2) 労働力の商品化

さて、ルカーチは、「商品が社会的存在全体の普遍的カテゴリー」となると「人間自身の活動は自分自身に対して客体化され、商品となるのであるが、この商品は、社会的自然法則の人間には疎遠な客観性に従う(8)」と述べているが、ここでかれは労働力が商品化されることをさしているのである。すなわち、労働力の商品化は、第一に、自らの労働能力の所持者が労働力を自己の所有物として、商品として自由に処分できる人格であり、第二に、かれが潜勢力としての労働力の実現=行使に必要な現実的対象性(労働対象・労働手段)から自由であること、すなわち「自由な」労働者の存在を前提している。このことは、一方における労働力の所持者および生産手段の非所持者と他方における生産手段の所持者および非生産者とへのいわば二個の人格への分裂を示すものであり、本源的

には生産者自身の対象的活動の現実的契機である対象性の他の人格への外在化を示すものである。かれらは、自己の労働力のほかには生産の契機をもたず、非対象的な労働の可能性（潜勢力）として生産手段の所持者に対し、労働力の価値とひきかえに労働力を販売することによって現実に自らの力能を外化し、使用価値としての己れの力（Kraft）を譲渡し、資本に属する権力（Macht）とするのである。しかも、己れの力能の譲渡によって実現する労働力の価値は、他のどの商品の価値とも同様に、労働力商品の再生産に必要な労働時間によって規定され、その賃金は労働力の再生産のための生活手段の購買を目的とするたんなる消過的な流通手段であって、貨幣としての貨幣ではけっしてない。

労働力の価値の実現は、労働力の譲渡（Veräußerung）すなわち己れの力能の譲渡＝外化（Entäußerung）としての疎外（Entfremdung）であり、その行使を資本の処分権に委ね、資本の権力＝意思に服属することによって現実的に対象的労働となるのであり、同時に労働者にとっては、対象的活動を自己目的とするのではなく、それを手段化して生活の必要（Not）に迫られた必要の実現を目的とする労働となるのである。この必要の充足は、労働が資本によって領有される外的な労働であるかぎり、労働者の消費生活における自己の再生産として、それ自体が資本によって領有されることになる。

ここまでのルカーチの物象化論は、不十分な論証のために不明瞭さと難解さを残しているとはいえ、『資本論』に即して論理の補足をおこなうならば全体として筋が通っていると思われる。すなわち、人間の同等な労働の関係は、直接に表現されるのではなく、等価形態および排他的な貨幣の物象的屬性を媒介して表現されるがゆえに、それが物と物との関係として、そうした物的対象の力（Macht）として現象するのであるが、この物神崇拜は、人間の本質力能である労働力が商品化することによって総体的なものとなる、という論理それ自体はまったくその

通りであるとわれわれは考えるのである。

(3) 「抽象的人間労働」認識の誤り

ルカーチは、さらに論をすすめて、商品流通が普遍化すると商品に対象化された価値が抽象的人間労働の産物であると同時に、主体においても、抽象的人間労働の同等性が「商品の事実上の生産過程の現実的原理となる」といっている。城塚登氏は、ルカーチにおける論旨の乱れとして、この「人間労働の抽象化」というかれの概念の主体と客体との二つの側面が全面的には対応していないことを指摘されている⁽⁹⁾。たしかに、ルカーチの「抽象的人間労働」という概念が商品交換において事後的に実現するあの価値を形成する実体的基礎であるという規定（客観的側面）においては正しいが、主体的側面としてルカーチの述べている商品生産の現実的原理という規定とはそのままでは対応しないし、後者の意味ではマルクスの抽象的人間労働概念とも一致しない。その理由は、ルカーチのいわゆる抽象的人間労働の主体的側面という概念が次のことを意味しているからである。ここでは、抽象的人間労働の主体的側面を手工業から単純協業、マニファクチュアを経て機械制大工業へと進む労働過程が発展すると「労働者の質的な、人間的、個人的な特性がますます合理化され、ますます強く排除されていく⁽¹⁰⁾」といっている。その特徴を客観的な機械体系の発達に伴う生産の総過程の力学や科学の応用にもとづく諸段階への分解、細分化された特殊過程への作業分割に求めている。ルカーチは、この細分化された部分労働の客観的編制原理をこの作業の要素化にもとづいてなされる作業の「標準化」と標準化された作業の所要時間の確定（時間研究、標準作業量）と結びつけて、要素化されしかも強制された労働を「人間労働の抽象化」と呼んでいるのである。すなわち、「一方では労働過程が、しだいに拡大する規模で抽象的な合理的な部分作業に分解され、それによって労働者と生産物全体との関係が分断され、労働者の労働は、機械的にくり返される専門的機能に変

形される。他方ではこのような合理化のなかで、また合理化の結果、合理的な計算の基礎である社会的に必要な労働時間は、はじめは経験的にとらえられる平均的労働時間にすぎなかったが、のちには、労働過程がますます機械化され合理化されるために、できあがった完結した客観性をもって労働者に対するような客観的に計算できる労働課業となるのである(11)」という。資本制大工業の下では、機械体系の**客観的編制**から出発して作業が要素化され、部分的・画一的な労働の繰り返しとして作業の質的個性が喪失させられるが、かかる事態をひきおこすのはすでに指摘した私的労働の社会的編制ではなく、工場内部の分業である。(そして、前者の私的労働の社会的編制こそが労働に抽象的人間労働という性格を刻印するのである。) したがって、このような意味での分業にもとづく協業は、たしかに、個別労働の質的相異の減少という意味においては労働のいわば「抽象化」に帰結するが、それは決して抽象的人間労働やその労働に量的規定を与える商品の生産に必要な社会的平均的労働と同一ではありえない。したがって、要素化された労働は商品の価値として対象化された抽象的人間労働ではなく、いかに分割された要素的部分労働であってもその直接的存在においては特定の使用価値を形成する質的な労働である。そして、この部分労働の具体的な有用労働としての質的性格はその共同労働にもとづく完成品においてははっきりと確認されるのである。

したがって、商品の価値形態がたんに物的対象性として人間の社会的交通＝および生産関係を抽象化し、自立化し、人々を「人間労働の直接的化身」としての一般的等価形態＝貨幣物神に拝跪させることと、有機的・共同体的な生産の全体——協働のメカニズム——が個別労働から解放されて機械的編制に客体化され、個別労働が要素化され労働者にとって労働が疎遠なものとなることとは、明確に区別されて把握されなければならないのである。このように、ルカーチは、商品の物神的性格や労働力の商品化を

そのまま無媒介的・直線的に直接的生産過程における「合理的機械化と計算可能性の原理」と結びつける誤りに陥っているのである。

3. 資本制大工業と労働の要素化

われわれは、いままで、商品の物神的性格が直接には、労働過程における作業の要素化、生産者の部分労働者化につながるものでないことを示してきた。しかし、この作業の要素化、部分労働者化の問題は、労働時間の延長、労働強度の増大、相対的剰余価値の生産などととともに、現代的貧困の最も重要な問題の一つである。したがって、ルカーチがこの問題に注目するのは当然のことといえよう。そこで、ここでは、こうした労働過程における問題の資本制的生産過程における位置を把握し、「合理的機械化と計算可能性の原理」の再検討の基礎作業をおこなおう。

(1) 対自然的関係行為の資本による領有

労働者が労働によって商品を生産するためには、第一に、他人の欲望を充足化する物として生産されなければならない、使用価値＝効用ある物として生産されなければならない。それゆえ、ここでは、使用価値の生産過程＝労働過程の考察からはじめる。

労働は、第一に、「人間と自然とのあいだの一過程」すなわち物質代謝の過程である。この物質代謝過程は、それが人間労働であるものとしては、盲目的な自然素材の変形としての作業ではない。「人間は自己と自然との物質代謝」を「自己の行為によって媒介」し、自然を規制し、制御するために自己自身を規制し、制御する物質代謝活動として自然に対して働きかけるのである。そのさい人間は、自然のうちにある法則性を意識し、自然においてそこに「成る」ものとしての結果を、行為の前に「観念的にはすでに存在していた結果」＝目的として表象し、「自然的なものの中に……彼の目的を実現」するために、自然の規則性に己れの意思と

実際の行為とを合致させ規制し制御しなければならぬ(12)。したがって、労働とは労働主体が客体的自然諸条件に対して関係行為し、それを領有する活動であり、単に物を手に入れる作業ではなく、目的を生産物として実現するために自己の意思・行為を自然諸条件に適合させ、「自己の自然を変化」させ、己れの自然における可能性＝「潜勢力」を発現させる、対象を所有する**意識的人格的活動**である(13)。

ところが、資本家が労働力 (Arbeitskraft)、すなわち労働力能としての潜勢力を購買した後は、「労働力の使用価値、つまりその使用、労働は資本家のものとなったのである(14)。」資本家が過程の主体として剰余価値の生産を唯一の目的として、そのために死んだ対象性(生産手段)に労働力を合体するのである。この場合、労働過程は、物と物とのあいだの過程ではあるが、資本とその人格的定在としての資本家に属する物と物とのあいだの過程、資本制の生産過程である。したがって、労働力の使用＝資本家による処分は、剰余価値の生産という窮極目的のために資本家の意思にもとづいて生産手段と労働力を編制し、労働者に必要な限りでの副次的目的を伝達する。こうして、資本家は自己の監督の下に労働者が秩序正しく、十分な強度で作業し、生産手段を合目的に使用するよう指揮する。本来、生産主体に固有の生産力 (Produktionskraft)、主体的契機であった**精神的諸能力 (Vermögen)** は、「他人の所有」としてまた労働者を支配する「**権力 (Macht)**」として労働者から外化し、かれらに対立する。

(2) 資本による社会的生産体の領有

比較的多数の労働者が、同時に、同じ空間で、同一商品の生産のために、「同じ資本家の指揮の下で働くということは、歴史的にも概念的にも資本主義的生産の出発点をなしている(15)。」したがって、比較的多数の人々が計画的に協力して労働するという形態、**社会的労働**または**共同的労働 (協働, 協業)**は、資本制の生産過程に固有の形態として現れ、資本制の生産様式の

全てを貫く基礎形態である。それゆえ、ここでは、この共同的労働の社会的労働過程としての側面から考察する。協業から発生する労働の社会的生産力または社会的労働の生産力は、他人との計画的な協働のなかで労働者の個体的限界を超出して彼の「**種族的能力**」を発揮することにもとづいている。そのゆえに、個別的＝個体的諸労働を超えた**労働の社会的生産力＝種族的能力**は、一個の生産体の全体として個別的諸器官の労働とは区別され、しかも個別的活動の調和が媒介された一般的な生産体の諸機能を必要とする。この共同的労働、協働の生産体全体の編制は、「指揮や監督や媒介の機能」という社会的・共同的労働の一般的諸機能によって果たされる。この指揮の機能によって生産体の全体は共同の目的を定立し、計画を設定して、この目的の実現をめざして**生産有機体の個別諸機能**、個体的諸能力の行使をその意思の下に規制する。ここでは、共同的な労働過程の性格をもとに指揮・管理労働が実際の作業労働から分化するが、それは多数の共同的労働の性格から生ずるかぎりでの一般的機能分化である。

ところで、多数の個別的労働力の直接的協働は、資本による大量の生産手段の集積を物質的条件とし、この条件のもとに多数の個別的労働力が購買されることによって可能となる。すでに(1)で考察したように、資本の「**推進的動機であり規定的目的である**」最大限の自己増殖 (G…G') のために労働者が「**資本家のもとの労働するということの形式的な結果**」としてもともと現われたただだった資本の指揮は、多数の協働の下では労働過程の必要条件＝現実的な生産条件として現れる。生産体全体を指揮し媒介する社会的労働過程一般に必要な機能は、ここでは、**生産体全体の統一も労働者の外に、諸労働力を社会的に編制する資本のうちにあるのである**。「それゆえ、彼らの労働の関連は、観念的には計画として、実践的には資本家の権原として、彼らの行為を自分の目的に従わせようとする他人の意思の力として、彼らに相対するのである(16)。」すなわち、種族的能力の發揮に必

要なかぎりでの共同的労働過程一般における指揮機能は、「資本主義的な、したがって敵対的な性格によって必然的にされるかぎりでの指揮の機能(17)へ」と転化するのである。われわれは、すでに、労働力の購買の結果、労働力の使用価値＝労働の処分権が資本家に帰属することを見てきたが、同様に、資本制的生産過程（資本の指揮に包摂された社会的労働過程）では、かれらの協働は、個別的＝個体的諸労働内部には実在せず、資本物象に領有されたかぎりでの**擬制的共同性**としてのみ実在するために、われわれの日常的意識にとっては、資本に内在的な社会的生産力として、「諸労働主体の真の共同性そのものとして、資本の自然属性として現象する。即ち、……資本家の指揮は単なる生産機能としての指揮そのものとして現れる(18)」のである。ところが現実には、社会的の共同の目的、計画、個体的諸能力の行使のために必須であった指揮は、ここでは、反対に、資本家による剰余価値の領有という目的を実現するための指揮——命令、監督——となる。このように、この指揮の機能は、排他的に**資本家に属する機能**として、**共同性一般における指揮機能**の反対物に転化するが、さらに再び、資本家は、「資本の名によって指揮する産業士官や産業下士官」、指揮・管理労働を専有する「特別な種類の賃労働者」にその機能を譲り渡す。そのため、資本の指揮＝単純な生産機能という虚偽の仮象は、資本の指揮という根源すら蔽い隠された**二重の仮象**となる。

(3) 資本による精神的諸能力の領有の完成 ——機械制大工業——

われわれは、いままで、はじめに自然に対する活動における意識性の資本による領有を、つぎに協業における共同性の（資本の指揮を媒介しての）資本による領有を見てきた。これら二つの資本制的領有は、後者の関係がより具体的に前者の関係を内包するという上向的な論理展開を示すものであった。ひきつづいて、ここでは、意識性および共同性の領有が一層具体的に

どのようになされるかを「分業にもとづく協業」という契機を媒介として考察しよう。

比較的多数の労働力を資本家が購買する結果、生産過程においてそれらの労働力が同一の資本の指揮の下におかれることはマニファクチュア成立の前提である。そのためには、一人の資本家への生産手段の集積がなされていなければならない。このことは、協業一般の成立の基礎と同様である。マニファクチュアは、社会的労働過程を特殊な諸段階に分解することによって、個別労働者の作業を単純化し、多数の単純化された個別諸労働＝多様な部分諸労働を社会的に編制する。このように、マニファクチュア的分業は、質的に多様な部分労働の社会的編制を生み出すが、同時に、部分労働者諸群の相対的な量的比例性、量的な均衡関係をもつくりだす。単純協業において各々の労働者が生産物を創る一連の諸作業を担うのに対して、マニファクチュアは協業にもとづく分業として手工業的熟練を前提としつつも手工業的活動を分解し、全体労働を部分労働に分解して、部分労働者を形成する。それゆえ、マニファクチュアにおける労働の社会的編制は「一面的な特殊機能にしか役立たないような労働力」を発達させるが、逆に、**部分労働者の一面性＝非自立性の相互依存**が労働の社会的編制＝**「全体労働」**の統一性＝自立性を保障する。ここにおける共同性は、単純な協業と同様、単なる機能する労働体としての社会的編制を根拠とするが、分業にもとづく協業として「その共同性は一層深化している(18)。」すなわち、「単純な協業はだいたいにおいて各個体の労働様式を変化させないが、マニファクチュアはそれを根抵から変革して、個体的労働力の根源をとらえる。それは労働者をゆがめて一つの奇形物にしてしまう(19)」のである。

ところで、この分業にもとづく協業という生産機能としての労働体＝社会的労働過程の特性は、一層深化した共同性を現実的根拠として、資本による共同性の領有を強固にする。この**機能する労働体＝社会的生産機構**が資本のもので

あることによって、諸労働の機能的に必要なかぎりでの結合から生ずるより高次の生産力は**資本物象の生産力**として現象し、物象化はさらに深化する。さらに、資本家は、資本家のものである共同性＝「全体機構」のただの手足でしかない部分労働者に対して一層容易に権原を行使するばかりでなく、作業場の単なる附属物としての要素化された生産的活動力（細分化された知識、意思、技能）に対立して資本にのみ集積された全体的知識、意思をもとにした支配権、資本の指揮と規律を生産に**不可欠の要件**とする。労働力の販売において形式的には自立しており、しかも労働過程においてその全過程に関係行為して一応の自立性を保持していた個体的労働力は、いまでは、一定の資本家の作業場でなければ、その資本に販売されなければ、細分化された生産的活動力を発揮できない。このように、労働者を不具化＝部分労働者化するマニファクチュアにおいて、資本の指揮と労働者の絶対的服従はいっそう具体的な基礎をうることになる。

しかしながら、マニファクチュアの技術的基礎は、作業を細分化しているとはいえ手工業的熟練に依存している。したがって、資本家に属する共同性＝全体機構も客観的な自立性をもたず、主観的な労働者の熟練（知識、意思、技能）に依存するため、労働者の抵抗に出会って、資本の目的に対する障害にぶつかる。マニファクチュアの狭い技術的基礎は、一定の発展度＝機械装置の製造に至って自己自身と矛盾し、マニファクチュアが否定され、機械制大工業の成立をみる。

機械体系は、個別道具機を結合して作業機を形成し、さらに**特殊**作業機の組合わせで**全体**機械体系として編制される。したがって、労働対象が相互に関連し合う各々の段階過程を通り、さらに各々の段階過程は相互に関連する道具機を通ることによって、個別的生産が営まれる。すなわち、労働の総過程が客観的に諸段階過程に分割され、総過程のこの分割は、「力学や科学の技術的応用」によって**客観的に編制**され

る。これと対照的に、マニファクチュアにおいては、特殊な部分過程は労働者の主観的な経験的熟練に合わせられている。そして、編制された機械体系は、その総過程の連続性をその本性とし、機械そのものが特殊な生産諸段階を媒介することによって完全なものとなる（自動機械体系の成立）。マニファクチュアにおいて各過程の分立化を原理とするのとは対照的に、発達した工場は人格的諸力から解放された各過程の連続が原理となる。ここでは、マニファクチュアにおいて共同性＝「社会的労働過程の編制が純粋に主観的であり、部分労働者の組み合わせ」であるのに対して、共同性＝社会的労働過程の編制は「客観的な生産有機体」の性格を有する。しかも、この機械体系における客観的共同性は、労働者の精神的諸能力を分解し、要素化したうえに、さらに、熟練労働力における知識、意思、技能を彼らから切断して機械の生産諸能力として転化したものである。

生産過程を資本の価値増殖過程において見るならば、機械は、連続する労働体、「直接に社会化された労働」、「共同的な労働」の客観的編制であるがゆえにかえって、資本の「権原および強制力原」としての役割をはたすのである。すなわち、資本家のもつ生産手段としての機械体系は、資本家が精神的諸力を奪われた個別的な部分労働者に対して、資本の意思、目的としての絶対的および相対的剰余価値の生産の、他人の労働を搾取するための**客観的擬似共同性**として、部分労働者を実質的に服従させる資本の権原、権力に転化するのである。そして、社会的労働過程＝共同性の目的、計画、細分化され要素化された個体的労働力の行使のための指揮機能もさらに発展する。「労働手段の様な動きへの労働者の技術的従属と……労働体の独特の構成とは、一つの兵營的な規律をつくりだすのであって、この規律は、完全な工場体制に仕上げられて、……監督労働を、したがって同時に筋肉労働者と労働監督者への、産業兵卒と産業下士官とへの、労働者の分割を十分に発展させるのである(20)。」

ここでは、労働者が生産手段を使うのではなく、逆に、生産手段が労働者を使うという転倒が完成される。機械と労働との、死んだ労働と生きた労働とのこの関係の逆転は、われわれの日常的意識にあたかも生産手段を価値創造力であるかのような虚偽意識を生みだし、さらに、**生産手段の自然属性がそのまま要素化された労働と強制的労働**（例えば、労働時間の延長、労働強度の増大など）との**根源**であるかのような仮象を生み出す。しかし、この仮象は、資本の権力がこの機械体系のもとで労働者に対する支配を完成するという条件のなかで、たしかに一つの仮象ではあるが、機械が労働者に対する搾取の最も有効な武器として利用される生産様式に現実的な根拠をもった仮象となるのである。

4. ルカーチにおける労働過程「合理化」論の性格

われわれは、すでに、ルカーチが商品の物神的性格や労働力の商品化をそのまま直接的生産過程における「合理的機械化と計算可能性の原理」に結びつけ、機械の客観的編制、作業の部分作業への分解と労働の質的、精神的性格の喪失に直線的、無媒介的に結びつけていることを見てきた。現実の生産過程では、資本制大工業の客観的編制が、労働の社会的生産力の資本による領有を完成させることをわれわれはすでに考察してきた。ところが、ルカーチは、商品の流通場面では過程をかなり現実的に考察しているにもかかわらず、直接的生産過程では生産過程を資本の労働過程と価値増殖過程の統一として見ることができず、単純な労働過程として抽象的にのみ考察してしまっている。

われわれは、ここでは、ルカーチにおけるこの労働過程「合理化」論の性格をややちいって考察しようと思う。かれのいう「合理的機械化と計算可能性の原理」とは次のようなものである。

I. 「めざしている結果のすべてを前もって……正確に計算するという意味での合理化は、どの複合物をもその要素にきわめて厳密に分解

し、それらの要素が生みだされる際の特殊な部分法則を研究することによってのみ達成される。したがって合理化は、一方では、全生産物の有機的な生産の仕方、すなわち伝統的な経験的結びつきをもつ労働の体験に基礎をおく生産の仕方から分裂せざるをえない。つまり、合理化は専門化なしには考えることはできないのである。……労働過程は、合理化された部分体系、その統一性がもっぱら計算によって決められ、したがって相互に偶然的なものとしてあらわれざるをえない部分体系を、客観的に総括するものとなるのである。労働過程の合理的、計算的分解は、相互に関係し合い、生産物のなかで統一的に結びついている部分作業の有機的必然性を破壊してしまう(21)。

II. 「労働過程の合理化の結果、労働者の人間的個性と特性は、この抽象的な部分法則の合理的に予測される機能に対しては、ますます誤ちのたんなる源としてあらわれるようになる。そこでは人間は、客観的にもまた労働過程に対する態度においても……機械化された部分として、一つの機械体系のなかに組みこまれるのである。そして人間は、この機械体系をすでにできあがったもの、自分から完全に独立して機能しているものとして見いだすのであり、この機械体系の法則に人間は意思を喪失して従わねばならなくなるのである。……意識から独立し、人間の活動から影響を受けずにみずから動き、したがってできあがった完結した体系としてあらわれる機械的、合法則的な過程に対して、人間が静観的態度をとる(21)。

以上に示したルカーチの労働過程の「合理化」論は、マックス・ヴェーバーの経営組織における合理性とその典型としての官僚制の理念像ときわめて酷似している(22)。しかも、この「労働過程の合理化」は、資本制的経営組織に一般化している事態であり、その認識根拠をテーラーの科学的管理法とその実践に求めているものでもある。テーラーの科学的管理法にもとづく作業の要素化、さらにこの要素化された作業の所要時間からなる標準作業量＝課業の設定

の設定と労働強化の強制は、今日においても資本蓄積の一基礎となっているものである。したがって、作業の要素化にもとづく専門化と機械体系の主体化と労働者の客体化、その結果としての労働強度の増大等の搾取の諸方法にかんするルカーチの現実認識は、一つの現実的根拠をもつのであり、たしかに労働過程における「現実的原理」の経験的な在り方を鋭くついている。しかし、かれの論理展開は、労働力の商品化＝その使用価値の譲渡による資本家への外化という**流通場面**での関係を解明しているが、資本の**生産過程**そのものの形態運動の把握がまったくなされていない。資本の直接的生産過程での機械体系にもとづく共同的労働の客観的分割原理を労働過程の側から考察し、労働過程の側のみから機械体系そのものによって、本来、労働主体にそなわった精神的諸能力を部分労働者が喪失し、抽象的に計算可能な「労働課業」を強制されるとするのである。それゆえ、ここでは、もはや労働手段と労働力との関係はたんなる物と物との関係として、個別的な部分労働の客観的な総括者である機械体系にもとづく合理性（計算可能性）による規定として、**資本の自然属性**として把握される。

したがって、資本制的生産過程における機械への労働者の絶望的隷属は、ルカーチにおいては、その社会的労働過程が資本物象の $G-[W \cdots P \cdots W']-G'$ の運動に媒介・包摂され、生産過程における資本家の規定的動機＝意思が最大限の剰余価値の獲得にむかって機能するものであることが見うしなわれているといえよう。そして、資本家による生産過程の指揮、機能資本家の作業労働に対する指揮が、共同的労働に不可欠な機能的連関を包摂しつつ、資本の機能に転化していることを見失っているといえよう。それゆえ、ルカーチのいう機械体系にもとづく作業の要素化と機械体系への労働者の全面的隷属は、われわれのすでに考察した、マニファクチュア段階における労働者の熟練、精神的諸能力を客体としての機械に移しかえ、そうすることによって、工場全運動を機械から出発せし

め、「労働手段が労働過程そのもののなかで資本として」強制的に労働者を活動させ、剰余労働を領有するという、労働過程に対する形態的な規定性のもとに再指定される必要がある。このようにしてはじめて、ルカーチの労働過程の合理化論は、その現実性を獲得すると、われわれは考えるのである。

5. 結 び —— 残された課題 ——

われわれは、これまで、マルクスの『資本論』第一部を手がかりにしてルカーチの「資本制大工業と労働の要素化」問題の現実的根拠を資本関係の物象化的構造のなかに求めてきた。すなわち、資本制的生産関係のなかに労働者の隷属や部分労働における精神的諸能力の喪失の現代的根源を見てきた。ところで、現代の生産過程におけるこれらの諸問題は、機械制大工業にもとづく労働過程の社会的編制＝共同性が完全に客観的に編制される事態を基盤＝母胎として、しかも**資本制的**に機械を充用することによって生起するものであった。資本制的な機械充用のなかで生起する諸問題のうちでルカーチが重視しているのは、労働の強度の増大である。そして、さらに、部分労働者の作業の要素化にともなう機械的共同性＝労働体の全体的編制の作用の自立→それらに対する労働者諸個人の隷属→それらに対する受動的態度、無関心である。すでに見てきたように、これらは、資本制大工業において客観的な必然性に転化する。

これらの諸問題は、機械制大工業を基礎とする社会的労働過程を母胎とすれば、資本制が揚棄されることによって「技術的必然」として**現実的な解決可能性**をうるが、社会的形態規定を異にしつつも社会主義体制においてもこれらの諸問題がひきつがれる**可能性**を残し、そのままでは直ちに**現実的な解決**に転化するものでない。さらに、高度に発達した資本主義社会の変革期においては、プロレタリアートがこれらの諸問題を現実各段階において管理し規制するための人格の陶冶、諸能力の形成およびプロレ

タリアートの階級的・民主的組織化がはたされないならば、資本制の揚棄すら実現しえないのではないだろうか。資本独占の下で「潜勢的」に開花している労働の社会化・社会的個体に対して私的資本独占が客観的に制約を加えているのであるが、この資本によって制限され社会化された労働を、**潜勢的**にだけでなく、**現実**において意識的に労働者諸個体の下に奪い返され、労働者諸個体の規制＝管理の下におかれるよう**実践的に解決**されなければならない。このことは、社会理論のうえでは、「協業と土地の共同占有と……生産手段の共同占有を基礎とする個体的所有⁽²³⁾」の再建と同一の課題をなすものである。この課題は、たんなる生産手段の共有および国有化によってはたされるのではなく、資本制社会によって準備された生産の社会化、生産手段の共同占有を基礎としつつ、自然対象と労働の共同性とを諸個体のうちに獲得する(aneignen)ことによってはたされるものである。したがって、この課題は、独立した私的商品生産におけるごとき**私的**個体的所有を再建しないが、社会的諸個体の**個体的所有**を再建するものである。所有が自然対象および生産共同性の物質的・精神的な獲得＝領有であるかぎり、個体的所有は労働者諸個体によるそれら対象の規制＝管理によって**実践的に**実現される。この目標の実現は、ルカーチの注目した機械体系への隷属、作業の要素化、労働強度の増大などの諸事実を**実践的に**克服することによってのみ達成されうる。かかる目標の実現は、共同的労働に不可欠の諸機能の連関を解明し、新たな社会的労働過程に適合し、それを不断に変革し更新することのできる能力と社会的労働過程を制約する資本の専制的支配を一步一步克服できる人格の形成、および、民主的規制＝管理へと接近する組織的で実践的な諸活動によってこそ主体的に準備されるのではないだろうか。ルカーチの提起した問題は、このような現代的ひらきをもって、この目標の理論的解明および実践的解決をわれわれに迫っているように思われる。

註

- (1) 筆者の知るかぎりでは、この点にふれた論稿は、林直道、城塚登、飯田信夫の三氏によって書かれているのみである。そのうちで、注目すべき論稿は、林直道「ゲオルグ・ルカーチの資本主義解釈と『物化』理論」(『史的唯物論と経済学』下巻)、城塚登「現代思想における主体性の問題」(『理想』No.416)である。林氏の論稿は極めて有益であるが、ルカーチによる物象化の批判的解明の努力を全て排除するため、ルカーチに対する外在的なイデオロギー批判に終始している。この点、本稿における物象化の現実的根拠の解明と対照的である。
- (2) 本稿をまとめるにあたって参照した文献のうちとくに有益であったものは次のとおりである。角谷登志雄『労働と管理の経済理論』、平田清明『市民社会と社会主義』、平田清明「個体的所有概念との出会い」(上)・(中)・(中の続)・(下)『思想』No.617~620、細谷昂『現代社会学と組織論』、石坂巖『経営社会学の系譜』、水谷謙次『労働疎外とマルクス経済学』、山口正之『現代社会と知識労働』、岩尾裕純『経営経済学』、占部都美『経営学のすすめ』、三戸公『官僚制』、坂本和一『現代資本主義の生産様式』(その他、以下の引用文献)。
- (3) K. Marx, *Das Kapital*, Marx-Engels Werke, Bd. 23, S. 86-87
- (4) ルカーチ『歴史と階級意識』城塚・古田訳162頁。
- (5) K. Marx, a. a. o., Bd. 23, S. 86
- (6) *ibid.*, S. 89
- (7) ルカーチ 前掲書 166-167頁。
- (8) ルカーチ 同上 167頁。
- (9) 城塚登「現代思想における主体性の問題」『理想』No. 416 22-23頁。この論稿は、ルカーチの変革主体論に焦点を合わせているため、本稿と課題を異にするとはいえ、労働過程の諸問題に接近するための視角を示すすぐれた論稿である。
- (10) ルカーチ 前掲書 168頁。
- (11) ルカーチ 同上 168-169頁。
- (12) K. Marx, a. a. o., Bd. 23, S. 192-193
- (13) 平田清明「循環蓄積論と歴史認識」『経済学と歴史認識』55頁。なお、この点については、『経済学哲学草稿』における「第三草稿」,「ミル評註」,『経済学批判要綱』の本源的所有の項を参照。
- (14) K. Marx, a. a. o., Bd. 23, S. 200

- (15) ibid S. 341
(16) ibid S. 351
(17) ibid S. 352
(18) 湯田勝「経営組織における役割関係——資本・賃労働関係の物象化的編制——」『社会学年報』Ⅵ 東北社会学会 102頁。なお、この論文は、近代経営理論を単なるイデオロギーとしてではなく、現実に根拠をもった仮象——生産関係から生ずる仮象——として把えるすぐれた分析を示している。この点については、K. Marx, a. a. O., Bd. 23, S. 352-353 を参照のこと。
- (19) K. Marx, a. a. O., Bd. 23, S. 381
(20) ibid S. 447
(21) ルカーチ 前掲書 170-171頁。
(22) 「物象化」を商品生産の資本主義的形態をぬぎにして、そのまま、労働過程の「合理化」に求めるヴェーバーの認識については、拙稿「マックス・ヴェーバーの近代認識——『事象化』(Versachlichung)の理念像に即して——」『社会学評論』No. 102 に述べている。
(23) K. Marx., a. a. O., Bd. 24, S. 995

The large capitalistic Industry and the Elementalization of Labour
——Criticism to G. Lukács' theory of *Versachlichung* in capitalistic relations——

Satoshi YOKOYAMA

In this article I attempt to study the realistic reason for rationalization in working process.

I think this reason can be clarified only by the examination in the concrete capitalistic relation as the description in Marx's *Das Kapital*.

This article contains the following chapters.

1. Preface
2. Lukács' recognition of fetishism and its reformation
3. The large capitalistic industry and the elementalization of labour
4. The theory of the rationalization in working process in Lukács
5. Conclusion —left tasks—